

「生体関連物質化学」領域

“Anglo-German-Japanese Biochemistry Meeting”

日独英学生交流セミナー

趣旨：

「生体関連物質化学」領域では、大学院生に、国際的な場でのコミュニケーション能力を身につけさせることを主たる目的として、ドイツ国マールブルク大学、英国ニューカースル大学との交流活動を行っている。2003年9月には総勢19名の教員・学生がマールブルクに赴き、第一回日独英学生交流セミナーを実施した。今回（2005年9月）は場所を京都に移し、第二回交流セミナーを開催した。開催場所を京都としたことにより、前回をはるかに上回る学生の参加が可能となった。

開催場所：京都大学、芝蘭会館

開催日程：2005年9月2日～9日

参加内訳：教員24名、博士研究員13名、学生83名（計120名）

相手機関の名前：マールブルク大学、ニューカースル大学

内容：

マールブルク大学生物学科微生物学研究室 Wolfgang Buckel 教授のグループ12名（教員1名、博士研究員1名、学生10名）ニューカースル大学化学科 Bernard Golding 教授のグループ8名（教員1名、博士研究員2名、学生5名）を招聘した。京都大学からは、工学研究科合成・生物化学専攻の青山安宏教授を代表とする「生体関連物質化学」領域10研究室の教員、学生が参加した。



9月5日（月）、6日（火）には、時計台記念館・国際交流ホールにてシンポジウムを開催した。合計39の演題（日本から20題、ドイツから12題、英国から7題）があり、生物化学の広い領域にわたる最新の研究成果が発表された（発表はいずれも口頭）。日本からの発表のうち、約半数は博士課程の学生によるものであった。英語での口頭発表が初めてという学生も多かったが、入念な準備をしてのぞんでいたと思われる、いずれの発表も、聴衆が十分理解できるレベルに達していた。質疑応答では対応に困窮する場面もみられたが、座長の助けなどで乗り切り、それぞれに大きな自信

を得たことと思われる。一方、発表後の会場からの質問は、教員からのものが大部分であり、学生からの質問は少なかった。出席者が多く、学生が気後れする雰囲気だったことも一因かもしれない。コーヒブレイクなど、1対1の場面では積極的に対話する姿が見られた。シンポジウムの初日終了後には、芝蘭会館山内ホールで懇親会を開催した。シンポジウムで発表の機会がなかった学生も、積極的に独英の参加者と交流をはかり、会は大いに盛り上がった。



シンポジウムの前日、9月4日(日)には、芝蘭会館において、ポスター発表会を開催した。日本側12名の学生(うち8名が修士課程)がポスター発表を行い、独英の参加者からの質問に答えたり、アドバイスに耳を傾けたりしていた。大部分の学生は、外国人と英語で話した経験をほとんどもっていなかったが、苦労しながらも、なんとかコミュニケーションを成立させていた。シンポジウムよりもリラックスした雰囲気できつ時間的にゆとりのある中で議論することが

でき、参加した学生にとっては、きわめて貴重な経験になったことと思われる。

このほか、独英の参加者を研究室に招いて、より緊密な交流をはかるなど、きわめて密度の濃い、有意義な会になったものと考えている。参加した学生は、ある程度の自信をつけたことと思われ、また、さらなる向上を目指す、良いきっかけになったことと思う。今回の交流会は、日本からの参加者のみならず、独英からの参加者にとっても非常に有意義なものであったと思われ、Golding 教授からは、次回は(おそらく21COEの事業ではなくなるが)是非、同様の会をニューカースルで開催したいとのことをお言葉をいただいている。



(記 栗原達夫)